

第3回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2023年9月19日(火) 19時~20時30分
- ◇方法 Zoomによるオンライン方式
- ◇参加者 28名

- ◇実践報告 鹿児島県薩摩川内市立市比野小学校教諭 菊永美樹先生
小学校5年 総合的な学習の時間 「かわひこ広めよう プロジェクト」

【実践概要】

○授業のねらい

昨年まで勤務していた屋久島町立神山小学校における実践

「本富の時間」(総合的な学習の時間)では、小学校1年から中学校3年まで「ふるさと屋久島の魅力」をテーマに学習を進めている

「気付き、考え、実行する児童の育成」

かわひこ…里芋の一種 伝統野菜 栽培に10か月かかる(4月~翌年2月)

昔は地理的・気候的制約により、神山地区でよく栽培されていた

従来はジャガイモやサツマイモを栽培していたが、先が見えていて面白くない

突然の電話「伝統野菜を育ててみませんか？」 鹿児島大学(農学部技術職員)中野さんより

- ・自分たちにしかできない「使命感」
- ・「伝統」であり「農業」である
- ・第一次産業 → 第六次産業への展開
- ・5年生の一年間の核となる

協働的な大人とのつながり、ESDアドバイザーとのつながりを通して、目指す子ども像に迫る

○実践の内容

中野さんから F1野菜と伝統野菜の違いを教えてください

かわひこを植える 肥料やり、水やりなどの世話を始める

かわひこについてのSWOT(強み、弱み、解決策)を書き出し、考える

国語:かわひこについてインタビュー調査、レポート作成

かわひこを育てていることを地域の人に知らせる ポスター作成

9月 かわひこ料理試作(コロッケ、かき氷のシロップ、煮物)

台風の被害を受けるが、2週間で復活

ニチレイに、「かわひこチャーハン」のレシピをプレゼン

試し掘りしたかわひこで、どうすればチャーハンに合うか調理してみる

どんな調味料が合うか試してみる

食味実験 元日に食べる伝統料理「元朝芋(がんちょいも)」づくり

農家の方から昔の農業について教えてください

町のイベントで掲示 県外の学校とリモート交流

2月 収穫 134kg パンフレット制作、販売(地域の店舗が協力)、旅館の食事に

協働的な大人とのつながり

中野さんとの出会い

6回来校 子どもたちの一緒に活動して下さった 遊んでくれたりもした
ほかにも、JAの方、農家の方、給食センターの方、地域の方、県外の方たち、企業の方・・・
教育DXを活用した協働的なつながり
「本気を出せば周囲は協力してくれる」「やりたいと思ったことは挑戦したらできる」

ESD アドバイザーとのつながり

屋久島町 ESD アドバイザー 杉下さん

4月 3～6年 オリエンテーション「SDGsについて」

SWOT (S 強み、W 弱み、O 機会、T 脅威) 付箋に短い言葉で書いて問題を見える化する
物事を多面的に捉える 解決策を自分たちで考える経験

収入から支出を引いた利益が 12000 円 来年の活動費に 5000 円使った後の 7000 円をどうしよう？

「ユニセフに寄付したいです」 少年赤十字の新聞を貼り続けていた、毎月寄付していた子ども
シリア、ウクライナ、アフリカなどへ

3月 「かわひこの栽培はどんな意味があったのか」

家族農業 規模が小さいから環境に負荷をかけない

女性や高齢者が働く機会 社会的・文化的価値を保存

→ SDGs のすべての目標の達成に関連している 大きな達成感

振り返ってみて

かわひこが学級の核になった 他教科への波及、発信力の向上・自信に

教師がファシリテーター、根回し役に徹した

各機関との連携をフルに生かした

収穫、販売の仕方に課題（湿気に弱い）

中野さんのコメント

当初消えゆく伝統野菜を地域で残すために始めた伝統野菜の教材化だったのですが、神山小学校で菊永先生が伝統野菜の活動を児童個々人の目標達成や児童みんなの協働的な目標達成に活用されたことを1年間見てきて、私自身の伝統野菜の教材化に対する考え方が大きく変わりました。

今では伝統野菜が残る残らないよりも、伝統野菜の活動が子ども達のこれから生きるヒントや自信を持って夢に向かう力に繋がればよいなと思っています。

杉下さんのコメント

Think Globally Act Locally をまさに実践している取組だったように感じる

「プロジェクト」になっていた 自分たちで答えを見つけに行き、その先にさらに次の課題があった屋久島の ESD は、小学校での取組が中学校にきちんとつながってきていることを実感している

しかし、やはり中学校はどうしても縦割りになっていて、小学校でのダイナミックな学びをなんとか中学校でもできないかと思う

【意見交流から】

- いろいろな人たちとの関わりを通して、子どもたちがどんどん自信をつけていったように感じる。
 - 教師が先回りするのではなく、子どもが見つけたり聞いてきたりしたことを、教師が子どもの願いを何とか叶えられないかと動いていた。
- この実践は一貫して「幸福感」を感じる。
 - かわひこを通して、「学校が楽しい」と感じてくれていたように思う。
- 当初の計画ではどこまで計画していたのか？
 - 最初はいいところ半分ぐらいか。ティーチャープログラムにおいて、いろんな先生からアドバイスをもらえて、どんどん構想も広がっていった。
- 六次産業化への展望や、ニチレイとのコラボ、JA などでの販売などについて、苦労されたことは？
 - ニチレイには抽選で当たって、家庭科の先生と相談して5・6年合同でやった。
保護者も理解を示してくれて、収穫や販売の協力をしてくれた。
- SWOT 分析をはじめ、様々な分析方法を他の学習などでも活用できるようになっているのが素晴らしいと思う。
 - そのままするのは難しいが、5年生の子どもでもできるようにカスタマイズすればいいと思う。
短い言葉で書いて貼れるので情報の整理にはやりやすい思考ツールではあると思う。
- なぜ伝統野菜だったのか。
 - F1 野菜・・・収穫は早いけど味が薄い、栄養が少ない
伝統野菜・・・収量は少ないけど味が濃く、栄養価も高い
中野さん「ほんとに美味しい里芋を食べたくないか？」 ⇒ 「食べたい！」
- 神山小学校では今年も去年に引き続き、かわひこの栽培をしている。バザーで広めたいとキャラクターを考えて、ぬいぐるみやプラバンを作っている。
神山小学校では、職員間で「本富の時間」を共有するために、「もととミーティング」を木曜日の放課後10分程度で自由参加で行っている。 ⇒ だれでも本富の授業ができるように！
- 中野さんのコメントにある、「今では伝統野菜が残る残らないよりも、伝統野菜の活動が子ども達のこれから生きるヒントや自信を持って夢に向かう力に繋がればいいなと思っています。」が、教員が目指すべき本質を示してくれているように思う。
- 子どもたちが自分のペースで探究できる環境になっていたのだと思う。拙速に「広めよう」ではなく、自分のものになってから「広めたい」と、それが必然になっていく過程が見えた。
- これだけ深い学びができるのも、「もととミーティング」のように、学校の中に「みんなでいい学びをつくっていこう」という土壌、文化があるからだと思う。